塗り潰された白黒

彩瀬　夏樹

振り返った視線の先にいる女が、こちらに微笑みを投げかける。極彩色の、ぴかぴかした、彩りを抱き締めたような姿。信じられなかった。あれ、と小首を傾げると共に揺れる、茶髪のウェーブがかった髪の毛。信じたくなかった。

「先輩ですよね？　高校のとき、美術部だった」

俺の知っている彼女はいつだって白黒だったから。

桜が視界を埋め尽くす四月。俺が三年のときに入部してきた彼女は、一言でいうと「変わった人」だった。

「萩原彩香です」

まず、自己紹介用紙にそれだけ記入して提出してきた。流石にこれはちょっと、と再提出を求めると、今度は漢字の上に「はぎわらあやか」とふりがなを振って提出された。凛とした表情で、こちらを困らせる気は微塵もなさそうだったから余計に困ってしまう。結局冊子には九割方真っ白のその一枚もそのまま載せたが、萩原さんはその冊子を見もしなかった。他の部員たちが色とりどりに絵を描いている中で、ぽつんと白黒のページはよく目立つ。

「萩原さん、冊子あれでよかったの？」

「はい。自己紹介はしていますし」

「そうだけど……一応、部員が仲良くしやすいように作っているものだからさ、もうちょっと……」

頭を掻く俺のことを、大きな瞳が見つめる。仲良く、とくちびるが言葉をなぞった。上手く飲み込めないような渋い顔。

「わたし、仲良くするのとか苦手なんです。それにここには絵を描きに来たんで」

きっぱりと言い放つ彼女に眩暈がして、しかし少しだけ羨ましかった。なんでもかんでも人に流される癖のある俺にとってその姿は格好良く映って、こうなりたいとさえ思ってしまう。荒波の中まっすぐに立っていられるような、そんな芯が俺も欲しい。後輩に憧れを抱くなんて変な話だが、あのとき確かに萩原さんに対して小さな感情が芽生えていた。

新緑が目に眩しくなってきた頃、萩原さんとはしょっちゅう顔を合わせた。他の一年生は友人と連れ立って訪れる人や、部室で談笑している人が多いが、彼女は違った。いつもひとりで扉を開け、アトリエに籠もり、最終下校時刻のチャイムが鳴る頃にひとりで出ていく。美術部、とは言っても実際創作活動をする人は部内に滅多にいない。俺はその滅多にいない内のひとりだ。アトリエでは誰もいないことが日常だった。だから、ゴンゴンと重たい扉が初めて叩かれたとき、ついにアトリエ撤去かと戦々恐々したことを覚えている。開けた先に萩原さんがいつも通り立っていてどれだけ安心したことか。

「萩原さん、調子どう？」

「ふつうです」

「そっか」

隣より少し離れたいつもの定位置に、カンバスと向き合った格好で彼女が鎮座している。溶く水の音、絵の具のにおい、遠く聞こえる運動部の声。光の影響を受けない地下のアトリエでは、学校がどことなく遠い。

「見ていい？」

返事はない。だが、少しカンバスから身体をずらしてくれた。その行動に甘えて彼女のそばに寄る。

「……なんで赤のとなりに黒を置くの」

「なんで……なんか置きたかったからです」
萩原さんの描く絵は下書きがない。真っ白のカンバスを、思い切りよく色で埋めていく。それは傍から見れば不思議な組み合わせで、見境なく汚しているようにも見えるらしい。しかし俺は彼女の描く絵が好きだった。絵の具をたっぷりつけた筆が自由に白い舞台を踊り、のびのびと息をしている。彼女の描く絵は確かに息づいていた。
「すごいね、俺には逆立ちしても出来ねえなあ」
ありがとう、と自分のカンバスの前に戻ると、普通の絵がそこにはあった。萩原さんのような息遣いが感じられない、良くも悪くも普通の絵。下書きがないと不安だし、ある程度色は事前に決めて置いている。「なんか置きたかったから」か。やっぱり、羨ましい。
「……先輩の絵も、わたしには描けません。というか、誰かと同じ絵なんてつまらないです」
筆を動かしながら、萩原さんがぽつりと呟く。
「わたしは、先輩の絵、好きですよ」
顔を上げると、彼女もこちらを見ていた。学校指定の白のブラウスと、飾りのない真っ黒のスカート。制服の中で唯一の彩りであるリボンは外されている。他の生徒は勝手に指定外のリボンやセーターで自分を染めるが、萩原さんはそういうことを一切していない。黒と白以外に彼女を纏う色がないから、頬に薄く色がついているのが目立っていた。数秒目を合わせて、萩原さんは再びカンバスに向き直る。盗み見ると、いつも通りの顔をしていた。
「ありがとう」
アトリエに俺の声が溶ける。改めて自分の絵を見ると最高傑作に思えた……なんてことはなく、変わらず普通の絵だった。ただ、持ち上げた筆は軽かった。

それから抜けるような青空の季節を通り過ぎて、俺と萩原さんは相変わらずアトリエで会うだけの関係を続けて、三年生は引退を迎えることになった。文化部だから引退後大きく変わることはないが、それでも感慨深いものがある。ひとつ卒業したような、そんな気分。
最後の挨拶の日、萩原さんはいなかった。記念品を渡されたときも、集合写真を撮ったときも、あの白黒の制服はどこにも見当たらなかった。しょうがないな、と皆はなんとなく笑って受け流していたが、俺だけはどうしてか彼女に会いたかった。
「俺、ちょっと抜けるわ」
なにか言っている同級生の声を背に部室を抜けて、足早に階段を降りていく。彼女の居場所には心当たりがあった。学校からどことなく遠い、いつもの場所。重たい扉を開くと、こうこうと電気がついていた。定位置とは違う席で萩原さんはじっとカンバスを見つめている。近づくと、驚いた顔をして迎えてくれた。椅子を引いて彼女の隣に腰を下ろす。
「俺の絵を見ていたの？」
「好きですから」
萩原さんの視線の先には、普通の絵があった。濡れた黒い瞳が静かに見据えている。絵を見ているような、どこか遠くを見ているような。
ふと萩原さんの肩に当たって、無意識に俺がだいぶ近い位置に座っていることに気が付いた。肩辺りまで伸ばされた艶やかな黒髪が、制服に包まれた柔らかい身体が、ぽってりした赤いくちびるが、手を伸ばせば触れられる距離にあった。自分の右手首をぐっと握りこむ。
「……楽しかったです。ここで描くの」
「そっか、良かったら来年もここ使ってよ。ご存知の通り使う人がほとんどいないからさ」
萩原さんの視線が、絵から俺へと移される。握っている手首がじんわりと汗をかいていた。
「先輩がいないのに？」
「え、え？」
聞き取れなかったわけではなかったが、聞き間違えたかとは思った。思わず聞き返すと、彼女の口角が持ち上がる。
「なんでもないです」
最終下校時刻を告げるチャイムが鳴るまで、俺と萩原さんはとりとめのない話を続けた。進学先がどうとか、画材がどうとか、ぽつりぽつりと中身のない話ばかり。
「先輩、失恋って何色だと思いますか？」
「何色、なにいろ……ごめん、浮かばないわ……」
「わたしもわからないです」
結局彼女の発言について深く触れることはしなかった。それは俺自身が臆病だったせいもあるが、「さよなら」と扉を閉めた萩原さんがいつも通りの顔をしていたから、かもしれない。そのまま、彼女とはそれっきり。視界がまた桃色になる季節に、俺は卒業していった。卒業式の日に萩原さんとは会えなかった。最後に校舎を出て振り返ってはみたが、地下のアトリエなど見える筈もなく、桜だけが俺を見送っていた。

半袖の腕に夏がまだべたべたしていたあの日で、俺の記憶の中での萩原さんは止まっていた。だから、突然現れた極彩色の女を「萩原さん」とすぐに認識することが

できなかった。ましてや当時の姿からは想像がつかないほど変化していたのだ、気づけというほうが難しい。
「萩原さん、今大学一年生だっけ？」
「そうですよ。やっと落ち着いてきた、って感じです」
立ち話もなんだし、と足を止めた喫茶店で、萩原さんはオレンジジュースを頼んだ。「私、コーヒー飲めないんです」とはにかむ女のくちびるには、しっかりと口紅が引かれていた。ピンク系の、目につく色。
「あの頃と雰囲気変わったね」
「え、そうですか。お化粧のせいですかね」
「それもあるだろうけど、もっと、こう……」
カラーになったんだね、なんて言うと怒られそうだ。
店員に差し出されたグラスに口をつける萩原さんを、間違い探しでもするように見つめた。ざっくりと胸元の開いたワンピースには、色とりどりに花が散っている。赤とか、黄色とか、緑の葉っぱも見える。グラスを握るその指には、マーブル模様のネイルが施されていた。かつての彼女はむしろ、爪ではなく手の甲のほうが絵の具で色鮮やかになっていたぐらいなのに。
「先輩、飲まないんですか？」
指摘されて慌てて頼んだアイスコーヒーを口に含む。苦みが舌に刺さって、喉に残った。
「大学って、美大？」
「いえ、私にそんな才能はないです。ふつうの、四年制大学ですよ」
そうなんだ、と驚いては見せたが、本当は美大に進んでいないことを知っていた。春休みに母校を訪れた際に、当時の顧問から聞いたのだ。あんなに才能があったのに、あんなに描くことを楽しんでいたのに、どうしてだろうとそのときはただ不思議だった。俺の記憶の中の萩原さんはいつまでも変わらず、あのアトリエで絵筆を持って笑みを浮かべているから。けれど今ならなんとなくわかる。この女は、萩原さんはきっといろいろ変わったのだろうと。そしてそれはたぶん俺も同じだ。
「先輩だって美大進まなかったじゃないですか」
「俺は才能がないから」
そうだ。俺も普通の四年制大学に進学して、絵は一切描かなくなった。サークルだって全然絵と関係ないところに入った。「絵が好きです」の一本槍では人生に太刀打ちできないと気づいてしまったからだ。絵筆はあれから持っていない。絵の具のにおいもずっと嗅いでいない。心地よかったあのアトリエの記憶はもう薄い。
「萩原さん、大学の自己紹介で名前だけ言った？」
「え？　あ、やめてくださいそんな昔の話。ちゃんと皆に合わせましたもん」
わざとらしく膨らませた女の頬はチークのせいでほんのりと赤い。少し伏し目をすると長い睫毛が影を作る。口づけたグラスには、口紅の跡が薄っすらと付着していた。大人っぽくなったな、とありきたりな言葉が浮かぶ。萩原さんが高校のときのように白黒になる日はもうないのかもしれない。
女に倣って俺もコーヒーを嚥下した。味も、指が濡れた感覚もきちんとわかる。瞳は女を映し、心臓の鼓動はいつもと変わりない。ただ俺の心の奥深いところで、なにかが音を立てて崩れた気がしていた。
普通の大学に進学したり、化粧を覚えたり、サークルで新しいことを始めたり、爪を整えてぴかぴかにしたり、髪の毛を染めたり、俺も萩原さんも高校時代の面影を塗りつぶしている。でも俺はどこかで期待していたのかもしれない。萩原さんはずっと変わらない、俺の好きな白黒のままだって。俺が酒や煙草を覚えた日も、学生時代はずっと絵にしていたＳＮＳのアイコンを変えた日も、彼女はずっとカンバスに生命を吹き込んでいる筈だと妄信していたのだろう。あるいは、萩原さんも俺と同じように変わってしまうのだと信じたくなかったか。
「……前にさ、『失恋は何色ですか』って俺に聞いたこと覚えてる？」
「えっと……」
「覚えてないか」
ごめんなさい、と曖昧に女が笑う。覚えてないよな、数年前の話だからな。俺達にとってはもう随分と昔だ。
高校時代の萩原さんなら、失恋という題で何を描くだろうか。思うままパレットに色を出して、絵筆をカンバスに滑らせていく彼女が頭に浮かぶ。いつも通りだったあの場所で、制服の萩原さんはカンバスをどのように埋めていくのだろう。彼女の思い描く失恋には何色が使われるだろうか。どうか白と黒は使わないでほしい、なんて、都合よく偶像に願った。
汗をかいているグラスを傾けて、一気に飲み干す。黒一色が無くなった。からんと小気味いい氷の音。口元を拭った紙ナプキンを、手に力を込めて握りつぶす。
「俺の失恋は極彩色だよ」
さよなら白黒の俺の恋。